

近代語における一、二人称代名詞の変遷について

房極哲*

目次

1. はじめに
 2. 江戸後期における一、二人称代名詞の使用状況
 3. 調査の概要及び分析
 4. 用例の考察
 5. おわりに
-
-

1. はじめに

明治期における人称代名詞については、すでに小島(1974)・小松(1996)(1998)(2000)・飛田(1974)(1992)等の研究成果が数多くある。これらの先行研究の中で、とりわけ小松の一連の研究では、江戸語の延長線で明治期の人称代名詞について述べ、人称が江戸語から東京語へかけてどのように変化したか、という問題意識から論じている。しかし、先行研究では、必ずしも人称代名詞を性差、年齢差、社会階層などという観点から論じていないようである。

拙稿(1998)(2002)(2003a)(2003b)では、明治期の人称代名詞の考察の一環として、明治期の一人称代名詞「わたくし」「わたし」、「わし」「おれ」、「ボク」「ワガハイ」を対象にその使用実態と待遇の度合いを中心に考究したことがある。

また、拙稿(2000)では明治期の二人称代名詞「アナタ」「オマヘサン」「オマヘ」を性差との関わりを中心に述べたことがある。ここでは表題の二人称代名詞を明治前期は『安愚楽鍋』『小公子』など6編、明治後期は『社会百面相』『三四郎』など4編の作品を資料として調査の結果を考察した。

本研究では、従来研究成果を踏まえ、近代語における一、二人称代名詞の変遷について性差を始めとした社会言語学的な手法を取り入れつつ統一的に考察する。このような考察によって、近代日本語の一、二人称代名詞の形成とその様子・実態がより明らかとなるであろう。

2. 江戸後期における一、二人称代名詞の使用状況

小松(2002)によると、日本語の人称代名詞の特徴的な体系は古代日本語から継承されたものではな

* 順天大 schools 専任講師 日本語学

く、中世以降に發達したものであるという。つまり、歴史的にみると、中世以降人称代名詞が發達したことが分かる。そして近世になると、人称代名詞がかなり複雑であり、状況に応じて柔軟に使い分けられ、相手との距離が適切に保たれる。しかし、近代になると、明治の初期と後期には大きな相違が觀察される。

まず、江戸期の状況について塩澤(1998)を参考とすると、先學の研究から江戸期の一人称代名詞は約40種類存在するという。もっともこの40種類には方言や限られた社會階層の人しか使わない代名詞も含めてある。田中(1973)(1983)では、近世前期の上方語の一人称代名詞を15種類を挙げており、時代が下る江戸後期(文化、文政期=江戸ことば)の一人称代名詞の主なものとして、次のような11種を挙げています。

- 1) 最も敬意の高い場合の言い方; 「ワタクシ」「コノホウ(武)」
- 2) 普通の敬語表現にみられる言い方; 「ワタシ」「ワチキ(郭)」「ワッチ(町)」
- 3) ごく軽い敬意のある場合の言い方; 「ワシ」「オレ」「オラ」「オイラ」「ワタイ(女)」「アタイ(女)」「ワッチ」

次に二人称代名詞について述べる。田中(1973)(1983)は、文化、文政期の二人称代名詞の主なものを、次のような13種類を挙げています。

- 4) 最も敬意の高い場合の言い方; 「アナタ」「オマエサン」「キデン(武)」
- 5) 普通の敬語表現にみられる言い方; 「オマエ」「オヌシ」「キサマ」「キコオ(男)」「コナタ」「オマハン(郭)」「オメエサン」
- 6) ごく軽い敬意のある場合の言い方; 「オメエ」「オノシ」「テメエ」

なお、明治期の幾つかの文典を検討してみると、便宜的に一部の人称代名詞は性差や社會階層という観点から捉えていることが特徴的ではあるものの、その他の各々の人称代名詞の明確な違いは分からない。そこで以下では、江戸語の使用状況を念頭に入れながら、明治期の口語資料である小説の會話文を調査し、人称代名詞の使用實態を社會言語學的な視点から分析・考察を進めることにする。

3. 調査の概要及び分析

3.1 調査の概要

まず、調査の概要を以下の<表1>から<表9>に示しておく。調査対象とした作品については、後掲の【資料一覽】を参照されたい。ここに一、二人称代名詞の変遷の推移を見るために、<表1>から<表6>にかけて主な作品の調査結果を挙げる。すなわち、<表1>と<表2>は明治初期の作品『安愚樂鍋(4-5年)』、<表3>と<表4>は明治後期の作品『社會百面相(明治35年)』、そして<表5>と<表6>は明治40年代の作品『三四郎(明治41年)』である。そして一人称代名詞の全体的な変遷の推移を把握するため、各一人称代名詞の使用者の数を<表7-1>(男性)と<表7-2>(女性)に分けて示しておく。

なお、<表8>と<表9>は明治期に刊行された十の作品からみた主な二人称代名詞の性別による調査

結果である1)。

<表1> <安愚楽鍋(明治4-5年)>における一人称代名詞の使用者数

人稱代名詞 性別	わたくし	あたくし	わたし(あたし)	わちき	わっち	われ	おれ	おら	おいら	こちとら	僕	我輩	愚老	拙	合計
男(人)	2	0	0	2	2	1	4	2	3	2	4	1	1	1	12語
女(人)	0	0	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2語

<表2> <安愚楽鍋(明治4-5年)>における二人称代名詞の使用者数

人稱代名詞 性別	あなた	あんた	おめへさん	おまへ	おめへ	きみ	てめへ	なんじ	尊公	うぬ	合計
男(人)	4	0	2	0	5	2	3	1	1	1	8語
女(人)	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	1語

<表3> <社會百面相(明治35年)>における一人称代名詞の使用者数

人稱代名詞 性別	わたくし	あたくし	わたし	あたし	わし	わっし	われ	われわれ	おれ	おら	おい	僕	我輩	拙者	合計
男(人)	14	0	1	0	4	1	2	13	8	1	1	26	23	3	12語
女(人)	8	0	21	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3語

<表4> <社會百面相(明治35年)>における二人称代名詞の使用者数

人稱代名詞 性別	あなた	あんた	おまへさん	おまいさん	おめへさん	おまへ	おまい	おめへ	きみ	きこう	きさま	そこ	そくか	てめへ	合計
男(人)	16	0	1	1	0	2	9	0	18	3	3	2	1	1	11語
女(人)	23	5	3	1	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	6語

<表5> <三四郎(明治41年)>における一人称代名詞の使用者数

1) この<表8>と<表9>は房(2000)によるものである。

人稱代名詞 性別	わたくし	わたし	あたし	僕	おれ	われ	われわれ	合計
男(人)	2	1	0	5	2	0	1	5語
女(人)	3	1	0	0	0	1	0	3語

<表6> <三四郎(明治41年)>における二人称代名詞の使用者数

人稱代名詞 性別	あなた	あんた	おまへさん	おまへ	おめへ	おまい	きみ	てめへ	合計
男(人)	5	0	0	2	0	0	5	0	3語
女(人)	5	1	1	2	0	0	0	0	4語

<表7-1> <一人称代名詞の使用者数、男性の場合>

作品	わたくし	わたし	われ	わし	わちき	わっち	おれ	おら	おいら	ごちとら	手前	我輩	僕	拙者	拙(せつ)	愚老
(安)	2	0	1	0	2	2	4	2	3	2	0	1	4	0	1	1
(春)	3	1	2	3	0	1	4	4	7	0	1	2	3	4	1	0
(埴)	4	3	0	7	0	1	7	5	1	0	1	0	0	0	0	0
(眞)	5	3	0	0	0	0	3	0	0	0	2	0	1	1	0	0
(勲)	2	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	1	8	0	0	0
(小)	1	1	0	6	0	0	5	3	2	1	4	0	4	0	0	1
合計	17	8	3	16	2	5	23	15	14	3	8	4	22	5	2	2
(社)	1	4	1	2	5	0	0	8	1	0	0	0	23	2	6	0
(三)	2	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	5	0	0	0
(雁)	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	3	0	0	0
(寂)	3	3	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0
合計	19	7	3	6	0	0	14	1	0	0	0	23	36	3	0	0

<表7-2> <一人称代名詞の使用者数、女性の場合>

作品	わたくし	あたくし	わたし	あたし	われ	わし	わちき	わたい	わっち	おいら	手前
(安)	0	0	0	0	0	0	4	0	2	0	0
(春)	7	0	5	0	0	0	7	4	0	1	0
(塩)	4	0	6	0	0	1	0	0	0	0	0
(眞)	2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
(藪)	6	1	7	4	0	0	0	1	0	0	1
(小)	3	0	4	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	22	1	26	4	0	1	11	5	2	1	2
(社)	8	0	21	3	0	0	0	0	0	0	0
(三)	3	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0
(雁)	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
(寂)	4	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	17	0	27	3	1	0	0	0	0	0	0

<表8> <主な二人称代名詞の使用数と用例数²⁾、男性の場合>

二人称代名詞 時期・資料	アナタ	アンタ	「オマヘサン」系	「オメエサン」系	「オマヘ」系	オメエ
明治前期(安)	4(8)	0(0)	0(0)	2(5)	0(0)	5(6)
(春)	5(7)	1(2)	2(7)	3(7)	3(7)	9(16)
(鹽)	3(17)	6(52)	4(8)	3(11)	5(15)	2(8)
(眞)	7(8)	0(0)	1(7)	0(0)	6(25)	1(2)
(藪)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	1(3)
(小)	2(66)	0(0)	1(1)	0(0)	6(19)	2(8)
合計	21(106)	7(54)	8(23)	8(23)	21(67)	20(43)
明治後期(社)	16(70)	0(0)	1(12)	0(0)	10(77)	0(0)
(三)	5(33)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)	0(0)
(雁)	0(0)	0(0)	2(2)	0(0)	2(13)	0(0)
(寂)	3(66)	0(0)	1(2)	0(0)	2(76)	0(0)
合計	24(169)	0(0)	4(16)	0(0)	16(168)	0(0)

<表9> <主な二人称代名詞の使用数と用例数、女性の場合>

二人称代名詞 時期・資料	アナタ	アンタ	「オマヘサン」系	「オメエサン」系	「オマヘ」系	オメエ
明治前期(安)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(10)	0(0)
(春)	5(32)	1(2)	4(4)	0(0)	6(17)	1(3)
(鹽)	5(22)	2(5)	4(22)	0(0)	3(20)	2(2)
(眞)	2(10)	0(0)	2(5)	0(0)	2(3)	0(0)
(藪)	8(19)	0(0)	2(4)	1(3)	6(13)	0(0)
(小)	5(15)	0(0)	1(2)	0(0)	3(23)	0(0)
合計	25(98)	3(7)	13(37)	1(3)	24(86)	3(5)
明治後期(社)	23(198)	5(11)	3(63)	0(0)	5(38)	0(0)
(三)	5(25)	1(1)	1(1)	0(0)	2(4)	0(0)
(雁)	5(15)	0(0)	2(4)	0(0)	2(7)	0(0)
(寂)	3(176)	0(0)	2(25)	0(0)	1(41)	0(0)
合計	36(414)	6(12)	8(93)	0(0)	10(90)	0(0)

明治期に特徴的な変化が見られる人称代名詞について述べる。<表1><表7-1><表7-2>を見ると、「わたい」「わちき」「わっち」「おら」「おいら」「こちとら」「手前(てまへ)」「拙(せつ)」などは明治後期の作品にはその使用例が現れない。これらの一人称代名詞の使用者の共通点は下層階級で使っていたことが指摘できる。また、<表7-2>を見ると、女性の場合は「わたい」「わちき」「わっち」など「わ系」の一人称代名詞が姿を消している。これは金水敏氏の言う「役割度度」³⁾の高い語でもあり、次

2) <表8>と表9)の中の数字についてみると、括弧の中は用例数を指す。括弧の外は使用者数を指す。

3) 詳しくは金水(2003:67-69)を参照のこと。役割語度は、ある話体(文体)が特徴的な性質の話し手を想像させる

第に廢れていく傾向が受け止められる。

以下、主な使用者を挙げる。

- ・「わちき」「わっち」を使用する人→男性：野幫間、落語家、芝居者。
女性：まじりみせの娼妓(おいらん)、歌妓(げいしゃ)、ころ、ひき。
- ・「おいら」を使用する人→なまけものの男、あくぬけした男、商法個(あきうど)。
- ・「こちとら」を使用する人→職人、馬。
- ・「おめへさん」を使用する場合(下位の人が上位へ使用)
芝居者→旦那、野幫間→客。
- ・「おめへ」を使用する場合(對等關係)。
あくぬけした男→友先生、商法個→商兵衛、なまけものの男→判ちゃん、
文盲の男→安さん。
- ・「なんじ」を使用する場合(對等關係、通常の會話ではない)：あくぬけした男→友先生。
- ・「尊公」を使用する場合：生文人→ただの人物。

次に明治初期の語が明治後期にも多く現れている語を挙げる。

- ・「わたくし」「おれ」(男)「僕(ぼく)」(男)
- ・「あなた」「おまへ」「君(きみ)」(男)

ここで使用傾向を見ると、明治後期においては、だいたい「わたくし」と「あなた」(男女)、「おれ」と「おまへ」(男)、「ぼく」と「きみ」(男)がそれぞれ對をなして使用されているのが特徴的である⁴⁾。しかし、ここでは一、二人称代名詞の間で對をなして使用される用例について詳しい言及はしないことにする。このことについては、房(2001)を参照されたい。

さて、上記の〈表7-2〉から人称代名詞の種類の変化からみて、江戸後期に比べて明治後期には女性の一人称代名詞がなぜ著しく減少したのか、という点が注目に値する。このことについては多様な角度から検証する必要があるだろう。ここではその理由(背景)について素朴な意見を三つ述べるに留めたい。

1)近代日本語の特徴の一つである表現様式の変化がある。主語の省略、これは一人称代名詞の省略と繋がる。

2)標準語政策、國語教育などが考えられる。田中(1999:94)は、東京の中流階層を核として、近代のことばの階層がかたちづくられ、昭和のはじめ頃まではこうした階層差はかなり強く残っていたとしている。このことを考えると、特殊な階層のもの、例えば人称代名詞からはあまりにも上品なもの、あるいは下品なもの(金水敏の言う役割度の高い語)などは人爲的に回避した可能性が考えられる。そして、人称代名詞に限って言えば、結局、中流階層の人称代名詞を基盤として標準語の教育が行われたのではなかろうか。

3)明治期に階級制度の崩壊、すなわち四民平等という時代状況があったのだが、とにかく男性より

度合いである、としている。これによると、標準語とは役割語度が0である書き言葉、役割語度が1である私的な話し言葉(男性語、女性語)の間とその周辺に分布する言葉(話体、文体)ということになる。

4)小松壽雄(1998)によれば、「きみ」と「ぼく」の對使用が明治以前、江戸末期に幫間(ほうかん)医者、武士、教養層の間で廣まっていたと考えられる、としている。

女性の方は社会的に「公の場」に接する機会が少なかったと考えられる。特に、女性の場合は家庭生活が重要視されて、男性より自分の言説・意見などを述べる場が整っていないため、自分の立場を示す一人称代名詞が文学作品の場面(話題)の単調さから単純(しかも女性らしい言葉、待遇価値の高い「わ系」に集中する傾向。)で済んだからであろう5)。

また、<表7-1>と<表7-2>を見ると、明治40年代の三つの作品『三四郎』(明治41年)、『雁』(明治44年)、『寂しき人々』(明治44年)の調査結果は、明治35年の『社会百面相』(明治35年)の結果とかなり異なっている。一人称代名詞の場合「我輩(わがはい)」「わっし」「おら」「拙者(せっしゃ)」などは姿を消している。このように見ていくと、明治35年を境目として40年代に入ると、ほとんどの一人称代名詞は現代日本語とほぼ一致していたことが分かる。なお、明治後期の一、二人称代名詞が現代日本語の一人称代名詞とだいたい一致していく背景には言文一致の運動と何らかの関連性があると考えられるが、詳しい検証は別の機会に譲ることにする。

4. 用例の考察

4.1 一人称代名詞

以下、各作品に現れた主な使用者(話者)とその相手を示しておく。ここでは紙面の都合上、それぞれの用例に関する具体的な説明は省略する。用例(1)から用例(16)までは、男性の一人称代名詞である。また、用例(17)から用例(26)までは女性が使用した用例である。

<男性>

「わちき」

- 1) 「私(わちき)を見るとおいらんが野図八さん浮さんと同伴かへと次の間へかけだしてきなすつたから私(わちき)がいちばんだまをくららせてへい浮さんはいまさめや」
(安愚楽鍋, 野幫間(32 3才)→客)

「わっち」

- 2) 「それに私(わっち)の方の太夫元さんハめつぼう方寸が廣大から顔見世でも仕初でもわき町よりハ一倍氣を入れて櫻を植えてもしみつれな樹ハ植込まねへからおのづから櫻に光りが出てサ」(安愚楽鍋, 芝居者→客)

「おいら」

- 3) 「商兵衛さん牛肉は横濱のことだが此家のはずいぶん食えるねへおいらア知己だけ亭主が並より氣をつけて極新しいのを食させるからはじめての牛店ナンぞへハめつたにいらねへヨ」(安愚楽鍋, 商法個(31, 32才)→商法家, つれの男)

「僕」

- 4) 「君牛肉ハ至極御好物とするさつのう仕るが僕(ぼく)なぞも誠實賞味いたすでござる」
(安愚楽鍋, いなか武士→隣のさむらい)

5) このことについては他にも様々な要因が考えられる。例えば、教育の影響(義務教育実施)や作品の性格(啓蒙的な側面)や当時の女性の社会的、身分的な立場の関係、あるいは言文一致運動などがあるだろう。これについて今後の課題としたい。

5) 「勿論僕(ぼく)は筆で飯を喰ふ考は無い。」

(社會百面相, 書生同士(小説家志願者→政治家志願者))

「我輩」

6) 「四民同一自主自立の權を給ハリ苗字帶劍袴でも洋服でも馬でも馬車でも勝手次第たとへ空乏困迫の我輩(わがはい)たりとも往時の我輩にあらず」

(安愚樂鍋, 新聞好きの男→つれの男)

7) 「我輩(わがはい)も随分盡力して見たが、何處にも據ない情實があつてノウ」

(社會百面相, 校長先生→若紳士)

「拙者」

8) 「拙者(せっしゃ)はお互いに金子は欲しくないが、」(社會百面相, 代議士同士)

「おれ」

9) 「オイオイ友先生コレサおれにばかりしやべらして猪口ハどうするのだナ」

(安愚樂鍋, あくぬけた男(34、5才)→二人づれ)

10) 「ハハア、そうか、おれは貴様に親切なのか?」(小公子, 侯爵→フォントルロイ)

11) 「俺(おれ)はさる機密筋からの電信で買いに掛かつたのだから請合つて儲ける。」

(社會百面相, 失意政治家→自分の妻)

「わし」

12) 「そんな奴知つていてたまるものかよ、わしの店へでも這つて見るが好い、どうしてやるか。」(小公子, ホップツ→セドリック)

13) 「俺(わし)などは名よりは實を取れで平凡な高等官になるよりは判任官の上席の方が結構だ。」(社會百面相, 老俗吏の父親→息子)

「わたくし」

14) 「へへエそれハ結構なことでございますわたくしなどもよい年になりますまで肉食ハけがれるものとおぼえましてとんと用いずにおりましたが、」(安愚樂鍋, 町人→土)

15) 「成程、それでは残念ですが、私(わたくし)も散歩は罷めます。散歩は罷めて是から歸ります。」(金色夜叉, 若旦那→お宮)

16) 「私(わたくし)も既から淑女會の事を伺ひに出来せうと存じておりました、」

(社會百面相, 雑誌記者→貴婦人)

<女性>

「わちき」

17) 「そりやアちつと譯があるのサ今までおまへにもはなさなかつたが私(わちき)やア十五のとしにちやんが相場とかにまけて母親とわちきをおきざりにして脱走してしまつたらうじやアないか」(安愚樂鍋, 茶店女(18、19才)同士;ころ→ひき)

「わっち」

18) 「おころさん私(わっち)をそんなはずツ葉だとおおもひか此せうばいじやア人のあらずそをいふのハ極しらうとだハネ」(安愚樂鍋, 茶店女(18、19才)同士;ひき→ころ)

「わたくし」

19) 「私(わたくし)は子供の爲に誠に氣遣はしく御座り升。」

(小公子, エロル夫人→ハヴィシヤム)

20) 「妾(わたくし)、あの課目表を見たら馬鹿々々しくなりましたワ。」

(社會百面相, 女學者→若い女(5、6才年下))

「わたし」

- 21) 「ダガネ、おまへとわたしは、モウふたり切になつてしまつたのだよ、ふたり切で、モウ外に何人もいないのだよ。」(小公子, エロル夫人→セドリック)
- 22) 「然うでしやうよ、私(わたし)の處なんざア何うせ歸りがけの捌序でなくつちやアお寄りぢやないんだらうよ。」(左巻, 茶屋の娘→魚屋の息子, 職人)
- 23) 「あら、妾(わたし)鱈尾さんと何も關係がありやアしないワ。」
(社會百面相, 女中→風俗紳士)
- 24) 「それんばかりの物を洗ふのはわけが無いから、わたしがするよ。」
(雁, 高利貸の妾; お玉→女中; お梅)
- 「あたし」
- 25) 「ナニあたしの針箱が通りみちに。オヤ又よぶヨ聞こえてゐらア。ドーレ。」
(藪の鶯, 清, 下女→お貞 主人)
- 26) 「妾(あたし)なんぞは姉さん、贅澤ぢやアありませんワ。」
(社會百面相, おそよ(妹)→織衛(25才), 資産家夫人)

4.2 二人称代名詞

二人称代名詞の場合も一人称代名詞と同様に主な使用者及び用例を擧げることにする。男性の使用例は用例(27)から用例(38)までである。また、女性の使用例は用例(39)から用例(47)までである。

<男性>

「おめへさん」

- 27) 「おめへさんのめへだが人間は腹がとくなくつちやア人はつかはれやせん」
(安愚樂鍋, 芝居者→旦那)

「おめへ」

- 28) 「どうしたつてかうしたて。お前(めへ)のめへだがの。おめへのこのおはねさんがの。例の後家の家へきやアがつて。」(藪の鶯, 車夫→馬丁)

「あなた」

- 29) 「殿様え、貴方(あなた)はいつ上つても都合が悪いから待てと仰しやいますがね、」
(眞景累ヶ淵, 宗悦, 町人→深見新左衛門 武士)
- 30) 「此處で彼様してお目にかかるも貴女(あなた)の御願が届くお引き合わせで御座いましせう」(春雨文庫, 寅吉, 柘屋の主人→書肆屋の妻, お岩)
- 31) 「はア、貴處(あなた)のやうに熱心に聞いて下さると僕も説教の仕甲斐があります。」
(社會百面相, 牧師→青年の信者)
- 32) 「あんた、此の馬は實に珍しい馬でね、えら一つ起こして、嚏一つした事がねえ、」
(鹽原多助一代記, 茶店の爺→お百姓, 角右衛門)

「おまい」

- 33) 「汝(おまい)も永年連添つてゐるから最う少と貧乏を苦しめないで平氣になれさうなもんだナ。」(社會百面相, 失意政治家→妻)

「きみ」

- 34) 「オイ愚助さん君(きみ)の處の賢兒はいくツになるネ」(安愚樂鍋, 新聞好きの男→愚助)
- 35) 「僕は君(きみ)と別れて行くのは嫌だけれど、僕が侯爵になつたら又た來るかも知れないよ。」(小公子, セドリック→チック)

36) 「君(きみ) 気がついてゐますか。あの建物は中々旨く出来てゐますよ。」
(三四郎, 野々宮→三四郎)

「きこう」

37) 「貴公(きこう)にも種々都合があるおやろうが、貴公(きこう)と我輩とは二十年來の關係おやから……」(社會百面相 教育家、校長先生→出版業者)

「きさま」

38) 「汝(きさま)は自慢ばかりしおるが一度當選つた事は無いぞ。」
(社會百面相, 書生同士;政治家志願者→小説家志願者)

<女性>

「おまへさん」

39) 「アラ厭なネ、私(わたし)とお前(まへ)さんと寝れば、人が色だと申します。」
(眞景累ヶ淵, お園、女中→新五郎、使用人; 元武士)

40) 「お前(まへ)さんは見附けない女中さんだが、どこから買ひにお出だ、」
(雁, 肴屋のお上さん→女中、梅)

「あなた」

41) 「何を仰しやいます、多助を遣つて良人(あなた)どうなさいませえ。」
(鹽原多助一代記, 元武士の妻、お清→夫、鹽原)

42) 「妾(あたし)なんか、貴客(あなた)どうせ人三化七ですもの、關係者なんぞ有りやアしませんワ。」(社會百面相, 女中→風通紳士)

「おまへ」

43) 「ネエおはねどんおまへのまへだが伊賀はんといふ人もあんまりひけうなひとじやアないか」(安愚樂鍋, まじりみせの娼妓(おいらん)→お茶屋の女中)

44) 「きいち、お前(まへ)先ア何處へ行つたんだい？」
(社會百面相, 地方有志夫人、お嶺→きいち、息子)

「おまい」

45) 「奈何してツて卿(おまい)、卿(おまい)も茫然してゐね……」
(社會百面相, 中學先生の母親→中學先生夫人、娘)

「あんた」

46) 「まことに此間もあんたの方へ向けてやつたら、演劇を見せてくれると云ふから遣つた所が、」(鹽原多助一代記, 茶店の婆さん→お百姓、角右衛門)

47) 「貴婦(あんた)また奈何して朝ッばらからお酒なんぞ飲んだの？」
(社會百面相, 貴婦人→男爵夫人)

以下、近代日本語における一、二人称代名詞の変遷について明治期に刊行された小説資料の用例を列挙、検討してみた。なお、本研究では、全体の一、二人称代名詞の変化について統一的に論じるため、個別的に各人称代名詞について詳細な検討は行わず、論を進めていたことを断っておく。上記に示した用例(1)から用例(47)までを、使用者の屬性(性別、社會階層、年齢など)と相手との人間關係、そして使用された場面状況などを総合して考察した結果、次のような結論が得られたのである。

(一) 明治初年の『安愚樂鍋』(明治4-5年)に使われている一、二人称代名詞の多くは依然として江戸後期のものが多い。明治初期に主に下層階級で用いられていた「わちき、わっち、おいら、こちとら」「おめへさん、おめへ」などはその使用が明治30年代ごろには無くなったのである。

(二) 明治期における一、二人称代名詞はなによりも性差が明らかとなる。具体的には男女による人称代名詞の数と使用した人称代名詞が別れている。例えば、男性専用として「おれ」「おら」「おいら(ほぼ男性)」「わし」「わがはい」「ぼく」「拙者(せっしゃ)」「こちとら」などがある。一方、女性専用は少なく「あたくし」「あたし」「わたい」「わちき(ほぼ女性)」などがある。

(三) 待遇表現の観点からみると、女性の場合は「わたくし」「わたし」、「あなた」を中心とした待遇価値の高い人称代名詞に使用の偏りを見せている。一方、男性の場合は待遇価値の高い人称代名詞に集中せず、待遇価値の低い人称代名詞も多く、バラエティーに富んでいる。

(四) <表7-2>から分かるように、女性53名が「わたし」を使用している。これに対して男性は15名が使っており、相対的に女性語であると言える。男性の主たる「わたし」の使用は若い知識人(若い紳士や青年學生が使用する程度)に限られる。

(五) 明治期を通じて男性は「ぼく」(58名)と「おれ」(37名)を幅広い社会階層や年齢層で多用している⁶⁾。これに対して、その他の一人称代名詞は性別による偏り(例えば、「わし」「わがはい」は高齢層の男性)と、男性の「わたくし」は場面依存型として使用されている点が特徴的である。

(六) 女性の「わたくし」の使用は、社会階層(主に上層の主婦層と下層の女中グループ)による使用傾向が見られる。しかし、男性は場面に強く左右され、女性の使用とは対照的である。

(七) 二人称代名詞の場合、性差も關与するものの、話し手の社会階層や年齢、話し手と相手との人間関係(上下関係及び親疎関係)などによってその使用傾向が強い。ただ、待遇価値の低い二人称代名詞の場合は男性に偏って使用されたが、その数は明治40年代になると、だんだん少なくなることが分かる。

(八) 二人称代名詞は「あなた」「きみ」(男性)「おまへ」の使用が主であり、「おまへさん」「おめへ」は衰退していくことが分かる。

(九) とりわけ、二人称代名詞の場合は、男女ともに「おめへ」の衰退とともに「あなた」(女性)の多用が目立つ。そして、明治30年代半ばの内田魯庵の『社会百面相』(明治35年)までは古めかしい言い方をする高齢層においては江戸語の痕跡が残っている。しかし、明治40年代の『三四郎』(明治41年)や『寂しき人々』(明治44年)になると、江戸語の名残はほとんど廢れてしまう。

5. おわりに

以上、本研究で考察したように、明治初期は江戸後期の一、二人称代名詞が依然として使われていたことが分かった。明治20年代から明治30年代の半ばにかけて東京語の一、二人称代名詞は定着しつつ、明治40年代にはもはや現代日本語の人称代名詞とほとんど一致していることが分かった。また、社会階層からみると、明治初期の下層階級で主に使用していた一人称代名詞「わたい、わちき、わち、おら、おいら、こちとら」、二人称代名詞「おまへさん」「おめへ」などは次第に消滅していく。そして明治30年代半ばごろの若い新知識人階級(いわゆる中上流層)が中心となって使用していた一、二人称代名詞が現代日本語の人称代名詞の根幹を形成しているともいえよう。

6) 例えば、<表7-1>を見ると男性の利用者の中、「ぼく」は調査した作品の中でもっとも多く58名が使用している。「おれ」は「ぼく」に續いての37名が用いている。両語の利用者は若い書生、青年階級を始めたとした幅広い年齢層や、身分の區別がなく、廣い社会階層にわたっている。

なお、江戸後期に男女ともに使用していた人称代名詞「おれ」「わし」などは、なぜ、どのような要因により明治期になると男性だけが使うようになったのか、という点を社会言語學的な観点から緻密に考察していくことが肝腎な課題として残る。

【参考文献】

- ・ 金水 敏(2000)「役割語探求の提案」『國語論究8. 國語史の新視点』明治書院 pp.311-351
- ・ _____(2003)『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店
- ・ 小島俊夫(1974)『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院
- ・ 小松壽雄(1996)「江戸東京語のアナタとオマエサン」『國語と國文學』73-10 東京大學國語國文學會 pp.61-73
- ・ _____(1998)「キミとボク—江戸東京語における對使用を中心に—」『東京大學國語研究室創設百周年記念國語研究論集』 pp.667-685
- ・ _____(2000)「オレ・ソチ・ソナタ・ワッチ・ワタイ—明治東京語女性人称形成の一考察—」『國語語彙史の研究十九』和泉書院 pp.1-16
- ・ 小松英雄(2002)「いわゆる敬語の亂れの根源をさぐる—動詞句コンプレックスから人称代名詞への移行—」『日本研究19号』韓國外國語大學外國學綜合研究センター日本研究所 pp.1-10
- ・ 塩澤和子(1998)「『古今集遠鏡』における一人称代名詞」『文芸言語研究言語編』34号 筑波大學文芸・言語學系紀要 pp.1-39
- ・ 田中章夫(1973)「近世敬語の概観」『近世の敬語・敬語講座4』明治書院 pp.8-28
- ・ _____(1983)『東京語—その成立と展開—』明治書院
- ・ _____(1999)『日本語の位相と位相差』明治書院
- ・ 房極哲(1998)「明治期の一人称代名詞「わたくし・わたし」—「社會百面相」を中心に—」『筑波應用言語學研究』5筑波大學文芸・言語研究科應用言語學 コース pp.101-116
- ・ _____(2000)「明治期の二人称代名詞「アナタ」「オマヘサン」「オマヘ」—その諸形と性差との關わり—」『日本語と日本文學』31号筑波大學國語國文學會 pp.15-26
- ・ _____(2001)『明治期における待遇表現の社會言語學的研究』筑波大學大學院博士學位論文
- ・ _____(2002)「『社會百面相』における—二人称代名詞—待遇表現の観点から—」『日本學報』第51輯 韓國日本學會 pp.61-72
- ・ _____(2003a)「明治期における一人称代名詞「わし」・「おれ」」『日本語文學』第16輯 韓國日本語文學會 pp.203-226
- ・ _____(2003b)「明治期における一人称代名詞「ボク」と「ワガハイ」」『日本學報』第55輯 韓國日本學會 pp.63-77
- ・ 飛田良文(1974)「明治初期作品の敬語」『明治大正時代の敬語・敬語講座5』明治書院 pp.37-83
- ・ _____(1992)『東京語成立史の研究』東京堂
- ・ 山崎久之(1963)『國語待遇表現体系の研究近世編』武藏野書院

【資料一覽】

- ・ 『安愚樂鍋』(明治4-5) 假名垣魯文著『明治文學全集1』筑摩書房 昭和41
- ・ 『春雨文庫』(明治9) 松村春輔篇『明治文學全集1』筑摩書房 昭和41
- ・ 『鹽原多助一代記』(明治17) 三遊亭圓朝著『圓朝全集卷ノ十二』春陽堂 昭和2
- ・ 『尋常小學讀本』(明治20) (卷一~七) (『日本教科書大系第5卷・近代編』) 講談社 昭和39
- ・ 『藪の鶯』(明治21) 三宅花圃 金港堂 明治21

- ・『五月鯉』(明治21) 巖谷小波『明治文學全集20』筑摩書房 昭和43
- ・『都鳥』(明治21) 石橋忍月『女學雜誌』102號-107號 女學雜誌社
- ・『さすかに雙子』(明治21) 美妙齋主人(山田美妙)『女學雜誌』116 號-136 號
女學雜誌社
- ・『眞景累ヶ淵』(明治21) 三遊亭圓朝著『圓朝全集卷ノ一』春陽堂 大正5
- ・『小公子』(明治23) バーネット作若松賤子譯『女學雜誌』227 號-299 號 明治23
- ・『書記官』(明治28) 眉山人(川上眉山)『太陽』第1 卷2 號 博文館
- ・『夜の鶴』(明治28) 櫻癡居士『太陽』第1 卷8 號-第1 卷9 號 博文館
- ・『金色夜叉』(明治30) 尾崎紅葉『明治文學全集18』筑摩書房 昭和40
- ・『左巻』(明治34) 川上眉山『太陽』第7 卷22 號-第7 卷23 號 博文館
- ・『東京病』(明治34) 江見水蔭『太陽』第7 卷 號 博文館
- ・『社會百面相』(明治35) 内田魯庵著東京博文館, 東京大學総合圖書館藏(明治36 年10 月第三版)
- ・『三四郎』(明治41) 『漱石全集第四卷』岩波書店 昭和41
- ・『それから』(明治42) 『漱石全集第四卷』岩波書店 昭和41
- ・『杯』(明治43) 『鷗外全集著作篇第三卷』岩波書店 昭和29
- ・『寂しき人』(明治44) ハウトマン作森鷗外譯 金尾文淵堂 明治44
- ・『雁』(明治44) 森鷗外 粗山書店 大正4



要 旨

本研究では、明治期を中心とした近代日本語における一、二人称代名詞について小説資料を調査し、社會言語學的な觀點を導入しつつ、考察を行ったものである。

考察の結果、次のような結論が得られたのである。明治初期は江戸後期の一、二人称代名詞が多く使われていたことが分かった。明治20年代から明治30年代の半ばにかけて近代日本語の一、二人称代名詞は定着しつつ、明治40年代には江戸後期の痕跡は廢れてしまい、もはや現代日本語の人称代名詞とほとんど一致して

いることが分かった。また、社會階層からみると、明治初期の下層階級で主に使用していた一、二人称代名詞、例えば、「わちき」「わっち」「わたい」「おら」「おいら」「こちとら」、「おめへさん」「おめへ」「おまい」などは次第に消滅していく。そして明治30年代ごろの若い知識人階級 いわゆる中上流層 が中心となって使用していた一、二人称代名詞「わたくし」「わたし」(主に女性)「おれ」(男性)「ぼく」(男性)、「あなた」「きみ」(男性)「おまへ」などが現代日本語の人称代名詞の根幹を形成していく。性差からみると、男女による使用差が顕著であり、とりわけ女性において、一、二人称代名詞の数が時代が下るにつれ、減少していくことが指摘でき、性差からも明らかな違いが察せられる。

なお、待遇表現の観点からみると、女性の場合は「わたくし」「わたし」、「あなた」を中心とした待遇価値の高い人称代名詞に使用の偏りを見せている。一方、男性の場合は待遇価値の高い人称代名詞に集中せず、待遇価値の低い人称代名詞も多く用いられ、バラエティーに富んでいることが分かった。

キーワード：近代語、人称代名詞、社會言語學、性差、社會階層差、
明治30年代、明治期小説

투 고 : 2004. 2. 28
1차 심사 : 2004. 3. 13
2차 심사 : 2004. 4. 3

住 所 : (우)540-742 全南 順天市 梅谷洞 315 順天大學校 日語日文學科
電 話 : 061)750-3454 011-9151-5462
E-mail : banggc@msn.com